

クリスティ の 古いオルガン

O・F・ウォルトン 著 岡多佳子 訳

たかはし きよし 絵



クリスティの
古いオルガン

岡多佳子訳

O・P・ウォルトン著



金子文子訳



- 1 古いオルガン 1
- 2 クリスティの初仕事 5
- 3 ある一月 5
- 4 メイベルのなみだ 9
- 5 あらしの夜 9
- 6 希望への道 9
- 7 まつゆき草 10
- 8 メイベルの訪問 10



- 9 トリフィイじいさんの親戚 8
- 10 夕陽 8
- 11 ひばりぼっち 12
- 12 クリスティの病氣 14
- 13 再会 14
- 14 なつかしい我が家 14
- ある年 14



一 直オルガン

「なつかしい我が家、おほどうちをわしまたこのみかす。」

まびれた裏通りにある下宿屋の二階の部屋から、手回しオルガンのささやき調べが流れてきました。このみじめな部屋にはふさおしくないような歌調です。こゝろをどこまで、家産の暖かみを知っている人は、そんなにはいません。そこは暗く、いここのちの暗いところでした。

一階に住んでいる人びとのなかには、むき出しの木のベンチにすぎないベッドで寝廻りまうちながら、なつかしい我が家、とはなんというちがいだらう、とため息をつく人もいたでしょう。夜はよけて、あうそくは消え、びんるの火も燃えつきましたが、オルガンの音は続きました。ちせん階段をあがっていけば、老人がたっぴとり腰掛裏面にすわって、ふるえる手で、いとおしそくにハンデルを回しているのが見えたでしょう。

トリファイにいさんは、自分のオルガンを愛していました。オルガンが、おじいさんの人



生のたったひとつのなぐさめでした。かれは、この世にひとりの方だともない、孤独な、貧しい老人でした。いままで愛した人はみんな死んで、話しあえる人、困ったことや、うれしいことをお話しやべりする人もいません。ですから、年輩いた心のなかにまだ残っている、なつかしい思い出のかけらををかき集め、そのすべてを、自分と長い年月をともしにしてきた、このオルガンに注いでいたのです。そのオルガンは、いまではとてども古びていて、時代おくれでした。前の方の赤い明燈はよこれ、破れていました。子どもたちが大好きな新しい曲をかかせることもできません。

ときどき、トリファイじいさんは、自分もこのオルガンに傾いているなと思つて、はつとすることがあります。もちろん時代おくれで、誰りがかりの人々が、かれらを見くぢしなから、憐れみのけで付つてしまうのを、しんぼう強いトリファイじいさんでも感じないわけにはいきませんでした。

まよふは、とくにそれが強く感じられた日でした。はだを切るような冷たい東風が通りぬすみすみまで吹きつけ、寒さが老人の体のしんまでしみこみました。すり切れた上着は、寒さを隠すにはくれません。散々きれないほど長い年月、ずっと磨てきた上着ですもの。無理もありませんでした。おじいさんのやせた、ふるふるする手は寒さでこごえ、オルガンのハンドルを締めていても、ほとんど感覚がありませんでした。そのうえ、ハンドルを回す

と、調へにかすかな表情がまじるのです。それは、このオルガンを作つた人と思つてもみながつたことでした。

トリアイじいさんのひける曲は、そんなにたくさんはありませんでした。「朝長孝白書」と「かわいそつちなマリリー・マン」と「ルール・ブルタミア」と、そして、もうひとつ、「なつかしき我が家」。これはトリアイじいさんのお氣に入りでした。かれは、いつもこの曲をとてもゆつくりひいて、鼻引かせたものです。きょうのように寒い日には、よるとるこの調へは、とても暖ましくひびきました。

でも、これも、トリアイじいさんやオルガンに、たいして注意をほらりませんでした。数人の子どもの方がかれを取半奪ち、おじいさんが聞いたことでもないような、いろいろの新しい曲をひいてくれるようにたのしみした。子どもたちは、「なつかしき我が家」などには興味がなく、まもなく飽つていつてしまいました。そのとき、教師が窓から顔を出し、よきげんを声で、この曲かなとこゝろをきわがせないで立ちのくように、と言いました。トリアイじいさんはおとをしく引き下がって、新しい軍靴と靴いながら、はかめもつとにぎやかを通りでひこころとしました。でも、ここでも、おまわりさんから通りが混雑するといけなから、やめてほしいといわれました。

気の毒に、トリアイじいさんは氣力を失いそつでした。でも、あきらめられませんが、ポケットには半ペニーも入っていませんでしたし、朝食もとっていませんでした。たまたまバスケットをかかえて通りかかった親切な商家のおかみさんが、ふるえてる老人をかわいそうに思つて、自分のポケットから一ペニーくれました。

こうして、トリアイじいさんは一日中ひきつづけました。何度も何度も、あの四つの曲が流れました。でも、この寒い日におじいさんが手に入れたのは、商家のおかみさんがくれた一ペニーだけでした。

目が腫れかかったので、おじいさんは道路につきました。途中、たった一つのペニーでパンを買ひ、おびしい屋根裏部屋に通じるきつい階段を、つかれた足を引きすつて、ゆっくりとあがりました。

かわいそうに、トリアイじいさんは、今晩とても寝ていませんでした。自分もオルガンも時代おくれで、もう世のものに思えました。ふたりとも、いっしょに年をとつてきたのです。オルガンが動かなかったころ、どんなにそれを誇らしく思つたか、よく覚えています。赤い顔地はかがやいていて、ひく曲はみんな流行のものでした。当時オルガンはのずからしく、人びとは立ちどまつて耳をかたむけました。子どもたちだけが泣いてはなく、おとなたちも——。当時、トリアイじいさんは誇り高い人でした。でも時代は変わり、いま、かれは自分が貧しい、ひとりばつちの、時代に取り残された老人で、オルガンも流行おくれにな

ったことを、つくづく感じました。そして、すっかり気落ちしながら、小さなだんごのなかの惣とかをかきだして、なんとも喉まろしくしました。

パンを食べ、温めなおしたお茶を飲むと、すこしは元気になり、気分を晴らすように、いつものようにオルガンに向かいました。かれにとって、これ以上のなごめはないのです。ここで下宿をはじめたころ、家主のおかみさんはトリファイといきんのオルガンに反対しました。ほかの人たちの耳きりになるというのです。でも、おじいさんが下宿代のほかに通一ペニー払う代わりに、いつでも好きなときにひけるようにとのむと、それ以上反対はしませんでした。

こうして、夜おそくまでオルガンに向かい、四つの曲に耳をかたむけているうちに、おじいさんの顔は明るくなり、心も晴々となっていきました。「お前は、いい友だからだ」とトリファイといきんは言いました。夜の扉裏裏部屋は、ほんとうにきびしいのです。それに、ここでは、だれもオルガンをけなしたり、流行おくれだという人はいません。トリファイといきんは心からオルガンを愛し、すくなくとも愛くらは、その編打もによくおしく大層にあつかうべきだと思っていました。

トリファイといきんはぜんぜん気づきませんでした。その夜、同じようにこの古いオルガンの音に引きつけられて聞き入っている子どもがいました。はいつくばって、ドアの大きな錠前を耳をくつつけ、じつと聞いている、よされた睡を遣た、小さい男の子がいたのです。かれは、下の大部屋にやっできて、固いベンチに腰になつたとき、トリファイといきんのオルガンが鳴りだしたのでした。はじめは、たいして気にはやしませんでした。でも、「なつかしい我が家」の最初の調べが流れたとき、小さいトリスタイはむくりと起き上がり、じつと聞き入っていました。それは、かれにとって大奇蹟でした。聞き出された日の思い出でした。「二、三か月まえ、おかあさんが最後になつた歌だったのです。」

その曲で、トリスタイはすべてを思い出しました。かぎりひとつない、うらぶれた旅籠、ベッドの上のおとろえなつたおかあさん、やさしくほほをなでしてくれた、なつかしい手、そして、この曲をうたってくれた、あの静かな声——、いまでもおかあさんの声が聞こえます。おかあさんは、なんてきれいになつたことでしょうか。トリスタイは、はつきりと覚えていました。そして、そのあとおかあさんが言ったこと——。

「トリスタイ、わたしは天国へ行くところなの、なつかしい我が家へ行くのよ、トリスタイ。」

これが、おかあさんの最後のことばでした。

それからというもの、小さいトリスタイにとって、とてもきびしい日が続きました。おかあさんのいない人生、それは、かれにとって人生ではなかつたのです。おかあさんが死